のアルベルゲルに宿泊し、次の朝そこをたつ時のことである。ひどく鼻を突く匂いがプンプンする。二段ベッドの上の若者がサロメチールを塗りたくっているではないか。「こいつ若いくせに、ゲルマン的な立派な体格をしながら、筋肉が弱い奴だ」と半分軽蔑の眼差しでみていた。後で分かったことだが、巡礼中に膝を痛めたと言っていた。大きなリックを担いでいたので、重さを聞くと、何と十八キロの荷物を担いでいた。「一体何が入っているの？」「まあ、いろいろとね」その若者は、ドイツの菓子職人。

アルベルゲルでは、シャワーしかない。場所によっては、水のシャワーだけのところもある。また早くシャワーを浴びた者は、温水の恩恵に浴することができるが、遅く到着した者は、その恩恵に浴せないところもある。おそらく、太陽熱を利用した温水シャワーなのであろう。風呂に入るためには、ホテルに泊まるしかない。筆者は時々はホテルに泊まり、風呂にして、マッサージをした。結構この風呂の中でのマッサージ効果はあったようで、筋肉痛に悩まされることはなかった。風呂というのは、日本人の叡智の産物だと思う。

3　人間関係のネットワーク形成期（連帯感、精神的高揚感）

巡礼行動の過程は、他者との相互作用の場を提供する。しかも、ザイアンスの単純接触仮説どうりで、同じ巡礼者に何度も出会うちに、親しみを感じるようになる。出会い－相互作用－集団形成の一連の過程を観察することができる。こうしたプロセスを観察しているうちに、ネットワーク形成にはいくつかの原理が働いている。まず、歩くスピードの速さの類似性の原理が働く。歩くペースが同じ者同士が、同じような距離を毎日歩き、結果として、同じ宿に泊まる。宿泊所が出会いの場になり、そこで情報が交わされ、親交が深まる。二番目の原理は、言語の共通性である。結果として、同じ国民、民族同士が行動をともにするようになる。フランス人はフランス人同士で、スペイン人はスペイン人同士で、一緒に歩き、共に食事をしている。言語が共通であるから、コミュニケーションが容易であることによる。だから複数の言語を話せる人間は、民族や国籍を超えた会話が可能になり、幅広い人々と相互作用するという利点を持つ。

サンチャゴ巡礼の場合は、最初から個人で出発する場合がほとんどである。最初から、親子、会社の同僚、夫婦、友人というペアーもいるにはいたが、後はほとんどが一人でサン・ジャン・ド・ポーを出発している。

この時期になると、巡礼者同士の連帯が生まれ、有用な情報が入り、巡礼が楽しくなる。たとえ個人で歩いていても、周りの環境や自然との対話、一体感、充実感等が生まれるようである。

「私は道沿いのすべてのものと語り始めた。木の幹、水たまり、落ち葉、そして美しいツタ等だった。・・・私は一種のトランス状態になっていた。」（コエーリョ，1987 p. 271）

4　順化期

恐らく10日から二週間ぐらいだと思うのだが、この時期になると、体が慣れて自動運動の如く歩くことができるようになる。慣れのために周囲への感受性が低下したためか、歩いてきた道や村についての記憶力が低下する。過ぎていった風景印象が希薄で、日記をつけるために、一日の出来事を回想しようとするのだが、その日のことなのに、なかなか思い出せない。

順化期の特徴は、むしろ歩かされているという感覚かもしれない。パエルほど、悟りきった感覚ではないが、以下に引用するような段階に達するのがこの時期なのかもしれない。

「その時から、私は一生で最も意味深い経験の一つを生きることになった。その声は森のどこから来たのではなく、私の中のどこかから来ていた。私はその声を・・・・・・・・・私はただ、道の道具となっていた。道は私を本当に「歩かせて」いたのだった。」（コエーリョ，1987 p. 275）

5　終末期

目標地点つまり聖地までの距離が100キロ・メートルを切ったあたりから、新たな葛藤が心の中に生じてくる。サンチャゴ・デ・コンポステラに早く着きたいという欲求と巡礼を終えたくない、もっと続けていたいという欲求が拮抗するようになる。バルで休息している時に、フランス人6人組みの一人が演説を始めた。リヨンの近くの町からやってきた男で、年金がもらえる歳になったので、軍を退役したとのこと。妻はまだ働いて